第四章　光る源氏の物語　紫の上に打ち明ける

［第一段　源氏、結婚承諾を煩悶す］

六条院は（源氏殿は六条院に朱雀院の姫宮を迎えることを）、なま心苦しう（何とも気が重く）、さまざま思し乱る（さまざま思い悩みなさいます）。

紫の上も（紫上も朱雀院が）、かかる御定めなむと（そうした御心積もりのようだと）、かねてもほの聞きたまひけれど（以前からも漏れ聞いていらしたが）、

「さしもあらじ（そんなことはないだろう）。前斎院をも（さきのさいゐんをも、殿は幼馴染みの前斎院にでさえ）、ねむごろに聞こえたまふやうなりしかど（親しく言い寄っていらっしゃったようだが）、わざとしも思し遂げずなりにしを（無理には夫婦関係を結ぼうとは為さらなかったのだから）」

など思して（などとお考えになって）、「さることもやある（朱雀院からあった姫宮との婚儀のお話はどうなりましたか）」とも問ひきこえたまはず（とも殿にお尋ねなさらず）、何心もなくておはするに（何も気にしていらっしゃらないのが）、いとほしく（気詰まりで）、

「この事をいかに思さむ（上は私と三の宮との結婚をどうお思いになるだろう）。わが心はつゆも*変はるまじく（私の上への気持ちは少しも変らないし）、*さることあらむにつけては（あのように受諾を決心するに付いては）、*なかなかいとど深さこそまさらめ（むしろますます上への気持ちが深まったものだが）、見定めたまはざらむほど（それがお分かり頂けない内は）、いかに思ひ疑ひたまはむ（どんなに私の気持ちを不審に思いなさることだろう）」　*「変はるまじく」の主語は「わが心」なので、形式上は三人称だが意味上は一人称であり、この「まじ」は推量ではなく意志だ。だから、この文は＜変るはずもなく＞ではなく＜変わらないし＞だ。　*「さることあらむ」も文意は一人称だ。だから、「さることあらむにつけては」は＜然るべきことがある際には＝祝言の時には＞ではなく＜さること（朱雀院であった先のこと＝院に受諾を申し上げたこと）につけては（を決心するに当たっては）＞に違いない。　*「なかなか」は分かり難い。この語に、三の宮も紫の上も＜どちらも同じく藤壺入道宮の姪なので＞という意味が込められているのかも知れない。というのも、「いとど深さこそまさらめ」が一般的な意味で＜他の女との縁談を考えると今の妻にますます情が湧く＞のだとしたら、そんな縁談は断れば良い。それが兄院からの依頼で断り切れない事情だとしたら、婚儀だから全く事務的な処理で済ますことは出来ないにしても、三の宮との婚儀は紫の上との情とは別のものとして、「いとど」などと上への情をこの縁談に関連付ける必要は無い筈だ。それが、多情な人の流儀だろうし、現に源氏殿は今までそうして来ている。尤も、源氏殿が祝言を挙げたのは故葵上と明石君と紫君だけかも知れず、王家血筋の紫君は今までその身分を脅かされずに来た、という事情は在るのかも知れない。それが、朱雀院の姫宮に対しては、紫の上は妾腹なので王家の正統性に於いて劣る。そういう事情が源氏殿をして、紫の上を事態の難しさに追い込む危険性を危惧させた、という文意かも知れない。いずれにせよ、この「なかなか」は三の宮との婚儀と紫の上との関係とを関連付けた源氏殿の認識状態を示している語なのだろうが、その認識が不明で難文だ。

など安からず思さる（などと殿は心穏やかならずお考えになります）。

今の年ごろとなりては(長く共に暮らしてきた、今となっては)、ましてかたみに隔てきこえたまふことなく(殿と上とはますます互いに分け隔て申しなさることなく)、あはれなる御仲なれば(親密な御間柄なので)、しばし心に隔て残したることあらむもいぶせきを(少しでも隠し事が在るようなのも心が晴れないが)、その夜はうち休みて明かしたまひつ(その日の夜は源氏殿はそのまま寝てお休みになりました)。

[第二段　源氏、紫の上に打ち明ける]

またの日(翌日も)、雪うち降り(雪が降り続き)、空のけしきもものあはれに(空模様も感傷的で)、過ぎにし方行く先の御物語聞こえ交はしたまふ(昔のことや今後の暮らしについて殿と上はお話し合い為さいます)。

「院の頼もしげなくなりたまひにたる(朱雀院の御病状が心配されるほどでいらっしゃるので)、御とぶらひに参りて(お見舞いに伺って)、あはれなることどものありつるかな(感じ入ることが数々あったのです)。

女三の宮の御ことを(院は母宮に死に別れなさった三番目の姫宮のお身の上を)、いと捨てがたげに思して(とても心配していらして)、しかしかなむのたまはせつけしかば(これこれこういう事情で私に頼みたいと仰せになられたので)、心苦しくて(力添え申したく)、え聞こえ否びずなりにしを(とても拒み申せず結婚を受諾いたしましたのを)、ことことしくぞ人は言ひなさむかし(大きく取り上げて世間で噂するかもしれません)。

今は(この年で)、さやうのことも初ひ初ひしく(幼妻も気恥ずかしく)、すさまじく思ひなりにたれば(気が進まなかったので)、人伝てにけしきばませたまひしには(人伝に御意向をお示しなさっていらした時には)、とかく逃れきこえしを(何とか逃れ申したが)、対面のついでに(御会いした時に)、心深きさまなることどもを(熟慮の上という事情を)、のたまひ続けしには(重ねて仰られたのには)、えすくすくしくも返さひ申さでなむ(とても素っ気無くお断り出来ませんでしたので)。

深き御山住みに移ろひたまはむほどにこそは(院が山籠りなさるときには)、渡したてまつらめ(姫宮をお迎え申します)。あぢきなくや思さるべき(不愉快にお思いでしょうか)。いみじきことありとも(何があっても)、御ため(あなたにとって)、あるより変はることはさらにあるまじきを(今までと変わることはさらさら無いので)、心なおきたまひそよ(気にしないで下さい)。

かの御ためこそ(全ては他に身寄りのない姫宮のための)、心苦しからめ(尽力なのです)。それもかたはならずもてなしてむ(その方も不足無くお世話いたします)。誰も誰も(誰も皆が)、のどかにて過ぐしたまはば(穏やかに暮らしなさればと)」

など聞こえたまふ(などと殿はお話しなさいます)。

はかなき御すさびごとをだに(ちょっとした殿のお浮気でさえ)、めざましきものに思して(神経質になって)、心やすからぬ御心ざまなれば(心穏やかでない御性分なので)、「いかが思さむ」

と思すに(上がどう思うだろうかと殿は気懸かりでいらしたが)、いとつれなくて(上はとても冷静で)、

「あはれなる御譲りにこそはあなれ(親心からの御委任なのでしょう)。ここには(私に)、いかなる心をおきたてまつるべきにか(何の存念が御座いましょう)。めざましく、かくてなど(目障りだと此処に居るのを)、咎めらるまじくは(咎められない限りは)、心やすくてもはべなむを(平気で居座ることが出来ましょうが)、かの母女御の御方ざまにても(あちらの母女御が私の叔母様に当たる御縁からしても)、疎からず思し数まへてむや(親しい身内と思って頂けるかと)」

と、卑下したまふを(と、上が卑下なさるのを)、

「あまり、かう(あまりこう簡単に)、うちとけたまふ御ゆるしも(お分かり頂けるあなたの御寛大さも)、いかなればと、うしろめたくこそあれ(何か私の知らない事情が在るのかと不安になりますが)。まことは(本当は)、さだに思しゆるいて(そのように穏やかに受け止めて)、われも人も心得て(あなたも姫宮も互いに尊重して)、なだらかにもてなし過ぐしたまはば(静かに暮らして頂けたら)、いよいよあはれになむ(実に有難いのです)。

ひがこと聞こえなどせむ人の言(悪口を言い立てたりする世間の声を)、聞き入れたまふな(気に為さいますな)。すべて(大体)、世の人の口といふものなむ(世間の噂というものは)、誰が言ひ出づることともなく(誰が言い出したことでも無しに)、おのづから人の仲らひなど(自然と他人の夫婦仲など)、うちほほゆがみ(面白がって)、思はずなること出で来るものなるを(意外な話になるものだが)、心ひとつにしづめて(そんなものに惑わされずに)、ありさまに従ふなむよき(実態を受け止めるのが良い)。まだきに騒ぎて(早まって動揺して)、あいなきもの怨みしたまふな(詰まらない嫉妬は為さいますな)」

と(と殿は)、いとよく教へきこえたまふ(丁寧に諭しなさいます)。

[第三段　紫の上の心中]

心のうちにも(紫の上は心の内にも)、

「かく空より出で来にたるやうなることにて(このように空から降ってきたようなことなので)、逃れたまひがたきを(御辞退なされ難いのだから)、憎げにも聞こえなさじ(嫌みなど申すまい)。

わが心に憚りたまひ(私に誠意を欠きなさり)、いさむることに従ひたまふべき(私が正すことに従いなさるべき)、おのがどちの心より起これる懸想にもあらず(本人同士の遊び心から起こった恋でもなし)。*せかるべき方なきものから(防げる方法も無いのだから)、をこがましく思ひむすぼほるるさま(無駄に思い沈んだ姿は)、世人に漏り聞こえじ(噂されたくない)。　*「せかるべき」は、「せく(塞く、塞ぐ・せき止める)」という動詞の未然形「せか」に可能の助動詞「る」が付いた＜ふせげる＞に推量の助動詞「べし」が付いた＜防げるだろう＞という言い方、かと思うが、現代語では仮定条件文での＜だろう＞は多く省かれる、かと思う。

式部卿宮の大北の方(父宮の大奥方は)、常に*うけはしげなることどもをのたまひ出でつつ(いつも私を呪わしげに仰いなさって)、あぢきなき大将の御ことにてさへ(対の姫が嫁いだことで姉上が生憎なことになった大将家のことにでさえ)、あやしく恨み嫉みたまふなるを(無闇に私を恨んで憎んでいらっしゃるので)、かやうに聞きて(今度はこの家に新婦がいらっしゃる話を聞いて)、いかに*いちじるく思ひ合はせたまはむ(きっと私にはっきりと天罰が当たったとお思いになることだろう)」　*「うけはしげ」は大辞林に＜のろう意の動詞「詛(うけ)わう」の形容詞形「詛わし」に「げ」の付いた形。いかにものろいたいというようなさま。のろわしげ。＞とある。馴染みの無い語感だ。　*「いちじるく」は形容詞「いちじるし(明白だ・はっきりしている)」の連用形、とのこと。現代語の「著しい」はシク活用だが、古語の「いちじるし」はク活用とのこと。「思い合はす」は＜思い当たる＞。「はっきり思い当たる」というのは、紫の上の立場が悪くなることを、式部卿宮の大北の方は＜呪ってきた効果の表れと納得する＞という意味なのだろう。

など、おいらかなる人の御心といへど(おっとりとした上の御性分とは言え)、いかでかはかばかりの隈はなからむ(何でこれくらいの邪推が無いものでしょうか)。今はさりともとのみ(今さら波風も無いだろうとばかり)、わが身を思ひ上がり(自分の立場を自負して)、うらなくて過ぐしける世の(安心して過ごして来た夫婦仲が)、人笑へならむことを(物笑いになることを)、下には思ひ続けたまへど(上は内心では心配していらっしゃったが)、いとおいらかにのみもてなしたまへり(表面はとても穏やかにばかり振舞っていらっしゃいました)。